

『桃木文庫』と桃木武平

久松康二

桃木武平氏は江戸末期か明治初期から大正末期か昭和初期のひと。生年と没年が確認できないが、氏は明治 36（1903）年 10 月、神戸市布引付近生田町二丁目（現在の中央区生田町）に「桃木書院図書館」を設立しており、その図書館案内に、当時の京都大学図書館長島文次郎氏が題辭を寄せている。即ち、『主人名は武平姓は桃木、世神戸の名族、曾て公職を掌り、勤と廉とを以て聞ゆ。一朝奮起、自ら資を捐て図書館を建て、有用の典籍を収めて自ら之を架列し、自ら細密なる目録索引を製し、又自ら「読書の樂」といふを印して読書之美風を養はんとし、篤学の士を待つこと恰も交友の如し』と。又氏自身の詞として、『余は世の素封家に比せらるべき身分にもあらざればまた名門名族の称を受くべきものにもあらず、只々此地に世々家居せる素町人なる而已』と述べている。

『神戸市史・本編各説』（大正 13，1924）には、桃木書院図書館は「蔵書は洋書約四百冊和漢書三千余冊」とあり、又、「書籍千二百九十七冊及其他百四十一點共市立図書館へ寄付 桃木武平」の記述もあり、更に市立図書館の貴重資料室には、桃木書院蔵書印が押印されている書籍と絵画（巻き物折本）が在蔵されている由である。

一方、『海事史料蔵書』（全 20 巻、昭和 4（1929）年～昭和 6（1931）年、住田正一編、巖松堂刊）の第一巻解題によると、

桃木武平生卒年不詳，據推測其應是江戸末期或明治初期至大正末期或昭和初期的人。桃木武平於明治 36（1903）年 10 月在神戸市布引附近的生田町二丁目（現在の中央區生田町）設立「桃木書院圖書館」。該圖書館的介紹中，有當時京都大學圖書館館長島文次郎的題辭，題辭曰「主人名武平，姓桃木，世代爲神戸有名之家族，曾掌公職，以勤與廉聞名。一朝奮起，自捐資建圖書館，收有用之典籍，自列架之，自製細密之目錄索引。又自印『讀書之樂』，欲養讀書之美風。待篤實之士，恰如交友」。桃木武平的自述則謙稱：「余之世家素無可比封家之身份，亦不足受名門之稱，只爲世世代代家居此地之平凡百姓而已。」

根據『神戸市史・本篇各説』（大正 13，1924 年）的記載，桃木書院圖書館的藏書有洋書約四百冊，和漢書三千餘冊。另有記述曰：「書籍千二百九十七冊及其他百四十一點同寄贈市立圖書館 桃木武平」。因此，現在的日本神戸市立圖書館珍貴資料室中，典藏有印有桃木書院藏書印的書籍與繪畫（含畫卷與摺本）。

另外，根據『海事史料叢書』（全 20 卷，昭和 4，1929 年～昭和 6，1931 年，住田正一編，巖松堂刊行）第一卷的解題，

掲載されている近世廻船資料等の多くは桃木武平氏收藏のものとあり、又、伝聞資料として「桃木武平氏談」が挙げられています。須田悦生氏の『台湾大学研究図書館蔵日本古典籍目録』の序文に、桃木氏は神戸の海運業者とありますが、『神戸開港五十年史』（大正 10（1921）年、神戸市史別録 海運）等の中には多くの海事関係者の名がありますのに、桃木武平の名は見られません。従って氏は海事資料の蒐集家蔵書家と思われます。氏は海運業者でもあったか、さらなる精査が必要だと思う。）

なお、昭和 57（1982）年に鳥居フミ子さんが作製された『国立台湾大学所蔵桃木文庫目録』の後記に、『桃木武平翁の旧蔵ニシテ曾テ京都帝国大学ニ依託保管シアリシモノ』、と台北帝大時代の記録が記されているが、『京都大学附属図書館 60 年史』（昭和 36（1951）年刊）には、初代館長島文次郎氏の記録として、「関西文庫協会の明治 34（1901）年 10 月例会」で、『神戸桃生山桃木書院桃木武平氏より、関西地方所蔵目録を本会に提出して聯合蔵書分類目録を編し、篤学者相互に閲覧の便を図らんとするの提案があり、出席会員の同意を得て漸次着手することに決したり』云々とありますので、或いはそのことを指しているのかも知れません。

而して桃木文庫は、昭和 4（1929）年 3 月末に、神戸の古書肆白雲堂を経て台北帝大図書館に納入されたのであるが、当時神戸の葺合区筒井に在った白雲堂さんは戦災で神戸を離れ、戦後は姫路市で営業していたものの、昭和 56（1981）年店主死去により閉店の由で、桃木書院図書

該叢書所収録の許多近世駁船資料，都是桃木武平的收藏。另外，該叢書也列載了傳聞資料「桃木武平氏談」。須田悦生於其所編的『臺灣大學研究圖書館藏日本古典籍目録』之序文中謂桃木氏爲神戸之海運業者，但是，『神戸開港五十年史』（大正 10，1921 年，神戸史別録・海運）等書中，可見許多海事關係者之名，但卻不見桃木武平之名，因此，桃木武平氏很可能是海事資料的蒐集家兼藏書家；其是否亦爲海運業者，尙有待進一步確認。

昭和 57（1982）年，鳥居フミ子所編之『國立臺灣大學所蔵桃木文庫目録』後記記載：「桃木武平翁之舊藏，曾委託京都大學保管」。另外，『京都大學附屬圖書館 60 年史』（昭和 36（1951）年刊行）的「關西文庫協會明治 34（1901）年 10 月例会」有關於其第一任館長島文次郎的記錄：「神戸桃生山桃木書院桃木武平氏提案，願提供其藏於關西地方的書籍目録，編製聯合藏書分類目録，以便利篤學者閱覽。提案獲出席會員之同意，決定逐漸進行。」此處所指書籍，或許即現藏於臺灣大學的「桃木文庫」。

『桃木文庫』是昭和 4（1929）年 3 月底經由神戸的古書店白雲堂售與臺北帝大圖書館。白雲堂當時位在神戸的葺合區筒井，後來因爲戰亂而遷離神戸，戰後又在姫路市繼續營業。昭和 56（1981）年因店主逝世而歇業。因此，無法直接向當事人探詢

館蔵書の中から台北帝大へ移った経緯を聞くことが出来ず、誠に残念です。恐らく、桃木武平氏は大正末か昭和初めに亡くなられたのではないかとおもわれます。神戸市立図書館にても生・没年やご遺族の所在が判明せず、神戸新聞社に問い合わせても返事がいただけないのは、先年の阪神大地震の影響かと思われます。

ところで『新修・神戸市史』（歴史編 IV 近代現代）によると、神戸市の水道敷設計画は明治 19 年以来コレラの再度の流行により遅延し、同 25（1892）年市議会で満場一致可決されたが翌年、下水道との優先順位等を理由として時期尚早論が「桃木武平」より飛び出し、水道調査委員が反論のため「神戸市水道弁惑論」を発刊して、漸く同 26 年 6 月に方針確立し同 30（1897）年着工とあります。その実況はともかくとして、桃木武平氏は当時市会議員だったようですから少なくとも 30 才前後と考えられますので、生年は江戸末期頃かと思われる次第です。

桃木文庫は、欠本が何冊かありますが、借り出していた教職員か又は学生が、1945 年 8 月の敗戦で返本する機を逸したと思われます。前記「桃木書院図書館案内」には、「本館は国史学の普及を目的」とし「我邦古史の経となるべきものは既に全備し緯となるべはものは大半は聚り」と自負していますから、現在の台湾大学図書館の桃木文庫は当時の桃木書院の全部の所蔵を持っていなくても、この文庫は写本、抄本、刊行本など多く含んでいるが故、日本国文学の研究には参考に値すると思う。

（1998 年 4 月稿）

桃木書院図書館的部分蔵書移至臺北帝大的經過。桃木武平氏很可能卒於大正末期或昭和初期。現在即使是神戸市立図書館，亦不知其生卒年以及其後代所居之地。神戸新聞社很可能因為受到幾年前的阪神大地震之影響，未能提供有關桃木的資料。

根據『新修・神戸市史』（歴史編 IV 近現代），明治 19 年間，因痢疾の再度流行，神戸の水道鋪設計畫再度延遲。明治 25 年（1892 年）市議會全體一致決議該計畫可付諸實施。但翌年「桃木武平」卻以下水道鋪設の優先順序待議爲由，提出時期尚早論。水道調査委員會爲反駁之，刊行「神戸水道弁惑論」，才得以於明治 26 年 6 月確立方針，而使下水道工程於明治 30（1897）年開工。不管實情是非如何，桃木武平當時若爲議員，由其當時可能的年齡，可推斷其生年可能是在江戸末期。

臺大圖書館『桃木文庫』的藏書較當初購入時，有所缺卷，這可能是借閱該文庫的教職員或學生在 1945 年日本戰敗而返日，錯失歸還機會之故。前述『桃木書院圖書館案内』中有云：「本館以普及國史學爲目的」，又云：「爲我邦古史之『經』的書籍已全備，爲『緯』之書籍亦大半聚之」；雖然臺大圖書館的『桃木文庫』並非當時桃木書院之所有典藏，但其中包含大量的各種寫本、抄本、與刊本資料，仍甚值得日本國文學史研究學者參考。

（1998 年 4 月稿）